園長通信～こころ～ №３９

かがやきファーム

2024.5.31

笹谷幼稚園には、畑がある。ご近所の方からお借りしているものである。決して広くはないが、園児たちには、ちょうどよい大きさである。

この畑では、じゃがいも、たまねぎ、なす、すいか、ごぼう、さといも、かぼちゃ、えだまめ、落花生などを栽培している。野菜の苗を植える。植えれば、水をあげなければならない。そのため、毎日のように、畑に出かけるようになる。いつも、年長児（５歳児）が年少児（４歳児）と手をつないで、一緒に歩いていく。先輩が、後輩の面倒を見ているわけである。道路を渡るときにも、手をつないで渡っている。

畑に着くと、畑の脇を流れている小さな川から水をいただく。子どもたちは、その水をジョウロに入れる。そして、先輩が後輩に教えながら苗に水をやっていく。中には、「あっ、てんとうむしだ」「先生、かもがいる」「これ、何だろう」などと、いろいろなものに興味を示す子どももいる。先生方は、「何だろうね」と一緒に考えてあげている。私は、その様子を写真に収める。

このようなことがよくある。最初は、水やりに来たのだから、遊んでいないで、やらせなくていいのかと思った。だが、どうやら、そうではないようである。苗に水をやるのは大事なことである。同時に、園の外に出て、いろいろなものにふれて興味を示すことも大切なことである。一生懸命、水やりをする子どもの表情はいい。虫や草花に興味を示す表情もまたいい。写真を撮っていると、そのことがよくわかる。

この畑には、名前がついている。「かがやきふぁーむ」である。命名の由来はまだ聞いていない。子どもたちは、園内でもかがやいているが、畑では、また違ったかがやきを見せてくれる。そして、子どもたちが育てた野菜もまたかがやくだろう。

収穫した野菜は、みんなでいただく。普段は、野菜が嫌いな子どもも、このときばかりは食べるから不思議である。直接体験の機会が減っている中で、子どもたちが、畑での体験を通して、気づいたり、考えたり、できるようになったりすることには、大きな価値がある。

幼稚園には、教科書がない。どんな集団で、どんな遊びを通して、どんなことを身に付けさせるかは、先生方が考えている。そこには、先生方の子ども一人一人を見る温かな優しいまなざしがある。保育のプロとしての見取りがある。

「今日は、どこかに行く？」「朝のうちに畑に行きます」「じゃあ、ついて行く」何だかうれしくなる自分がいる。苗の生長とともに、子どもたちも成長していく。それを見守ることができるのは、幸せなことである。